

# 偕行現代考

## 英国のEU離脱の火種

編纂委員会

トランプ大統領の出現以来、なぜか世界が落ち着きを無くしているように見える。プーチン大統領や習近平主席のワンマンぶりや強硬な政策遂行姿勢も不安定に拍車をかけている。

このような状況の中でEU離脱交渉が始まっているが、先行は不透明である。特に世界を不安に陥れそうな火種が、北アイルランドとアイルランドの問題である。

北アイルランドは、アイルランド島の北部にあり、スコットランド、イングランド、ウェールズと共に「連合王国」を構成する4地域の一つである。

人口は、約180万人、英国の人口の約3%に過ぎない。プロテスタント系の移民が多い北部は英国領に残り、カトリック系の住民が多い南部は1937年に独立した。

しかし、北アイルランドでは、英国の統治を望むプロテスタント系とアイルランドへの帰属を望む少数派のカトリック系の住民対立は武力闘争に発展し、約30年間内戦が続いた。この間の犠牲者は、約3500人と言われ、住

民の心に残る傷はまだ癒えていない。

1998年の和平合意の後、ここには2つの「風変わりな国境」が残った。

一つは、北アイルランドの内なる国境である。和平合意で、北アイルランドの住民は英国籍かアイルランド籍を自由に選べるようになった。プロテスタント系は元々英国からの入植者が多く英国籍を、アイルランド島出身者であるカトリック系はアイルランド国籍が多数を占める。

両派の居住地を隔てる壁は、あちこちにあり、中心都市ベルファスト市内だけでも50カ所以上存在し、中には鉄条網が付けられた壁もある。この壁は、両派の衝突を防ぐために、英国政府が建設したもので、現在も取り払われてはいない。壁には、自由に行き来できる扉があり、昼間は解放されているが、夜間は今でも施錠されている。

プロテスタント側の住宅には英国旗がはためき、カトリック側にはアイルランド国旗が掲げられ、壁に1916年に起きた英国からの独立を求める武装蜂起の絵が描かれている。武力闘争は終わっているが、プロテスタント系住民は英国統治の継続を求め、カトリック系住民はアイルランドへの帰属を求めていることに変わりはない。

が離脱を支持し、カトリック系住民の約8割が残留を支持した。

両派住民の交流事業に取り組むNGOなども存在するが、一般住民は壁を隔てて、文化も国籍も祝日も違う相手との交流を拒否する人も多い。

友人が、「昔カトリック系の教会の尖塔が高いと、プロテスタント系の教会が高い尖塔を作り、それを見たカトリック系が尖塔を高くするという競争をした時代があった」と話してくれた。

そして、もう一つの国境が、北アイルランドとアイルランドの国境である。武力紛争時代、英国の治安当局によつて厳重な検問が実施された検問所は、カトリック系武装組織「アイルランド共和軍（IRA）」によつて度々攻撃された。

しかし、和平合意後検問所は廃止され、EU内移動と同様に自由に住民は往き来している。今では、1日約3万人が国境をまたいで通勤し、1月に約230万台の自動車通過する。

当然国境の表示もなく、唯一変わるものが制限速度表示で、マイル表示とキロメートル表示である。もし、人や物が自由に交流出来る国境に再び検問所や税関が復活すれば、アイルランド島全体の経済に冷や水を掛けることは間違いない。また、国境の閉鎖がもたらす一つの壁に新たな命を吹き込むことに

なれば、住民交流の夢だけでなく、和平合意への影響さえも避けられないかもしれない。

では、国境は今のままに自由往来でよいのかというと、そう簡単ではない。ここは一つの国境ではあるが、見方を変えれば、英国とEUの国境でもあるのだ。極端な言い方をすれば、もしこの国境が今のままであれば、英国はアイルランドを経由するだけで、EUと同じ恩恵を受け続けることができ、EU離脱はまやかしとなる。

ブリュッセルで行われる英国とEUの離脱交渉は、この国境の火種を消し去る名案を持っているのだろうか。

アイルランドのコペニー外相は、「物理的な国境ではなく、見えない国境を維持しながら関税をかける方策を探っている」と語る。その理由として、国境は500km、道路は400以上あり、検問は非現実的であり、英国との貿易額は年650億ユーロ（約8兆5千億円）は無視できない。また、アイルランド国籍を選択した北アイルランド住民への配慮も必要だ。

いずれにしても、この国境は何らかの形で復活する。ベルリンの壁がなくなって、28年たっている。この不安定な臭いのする現在の国際情勢から抜け出すために、お互いの垣根を外すことから始めるべきである。